

研究ノート

体罰に関する研究

Research on corporal punishment

佐藤 国正

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2020年3月12日 受理)

I. はじめに

2012年頃に大阪で起こった部活動指導者の体罰による高校生の自殺によって、我が国の体育スポーツの指導現場の有り様は大きく転換した。2013年4月に日本オリンピック委員会や日本体育協会（日本スポーツ協会）などの体育スポーツ関連5団体は、暴力根絶のための集会を開き、従前にスポーツ指導場面での暴力行為が存在したことを認めた上で、暴力根絶宣言を呈している。さらに、文部科学大臣やスポーツ庁長官も体育スポーツ場面に生起している暴力やハラスメントについて警鐘を発している。

従前の体罰に関する研究では、体罰の実態把握や意識に関する研究（例えば、阿江，1991；藤田ほか，2014；村本・松尾，2016；谷釜ほか，2016；宮坂ほか，2016；佐久間，2016；長谷川，2016），体罰の防止に関する研究（谷釜ほか，2016a；谷釜ほか，2016b；谷釜ほか，2016c；山川，2017），体罰が生起するメカニズムや体罰とは何かを問う理論研究（阿江，2000；松田，2015；松田，2016；大峰，2016）がなされてきた。

学校運動部活動のバレーボール部に着目し

てみると、2013年浜松日体高等学校男子バレーボール部，2015年佐野日大高等学校女子バレーボール部，2017年足利工業大学附属高等学校男子バレーボール部，2017年松本国際高校男子バレーボール部，2018年不来方高等学校男子バレーボール部，2019年長野日本大学高校女子バレーボール部において体罰が報告されており，今日に至っても体育スポーツの指導場面での体罰や暴力，ハラスメント等の行き過ぎた指導は根絶しておらず，それらの行為を苦に自ら命を絶った生徒や病院への通院，登校拒否等の不登校や転学などの対応を余儀なく選択した者もいるのが実態である。

体育スポーツ指導現場において，体罰などの暴力的指導の根絶には至っていないという課題が繰り返しの議論的となっていることを念頭に，本稿では体罰に関するメディア報道をとおして暴力的指導に至るまでの経緯を分類しながら，長らく続く体育スポーツ指導場面の体罰問題の根源的理由を再考することを目的とした。

人は何故，暴力をするのか。暴力の人間学的考察の著者である小林は「暴力は人間の意志によって惹起する限り，その根源には意志を喚び起す欲望がある」（小林，2011）と言

及し、欲望が暴力の根源であることを指摘している。一方、社会心理学者の大淵憲一は、「攻撃という概念で暴力を捉えながら、暴力は不快感情の表出や発散またはそれらは欲求を解決するための手段と位置づけながら、さらに道徳性の欠如が起因している」（大淵、2007）ことを言及している。

II. 研究の方法

研究の方法には、桐蔭学園図書館総合目録内から閲覧可能な検索サイト「朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱビジュアル」を用い、部活動中における体罰問題に関する新聞報道の記事を抽出し、内容の分析を実施することとする。記事の抽出には検索キーワードを用いるが、そのキーワードおよび対象紙誌については各項で適宜触れることとする。

Ⅲ. 2000 年以降に報道された体罰に関する新聞記事（新聞記事数と新聞記事の分類）

ここでは「朝日新聞記事データベース聞蔵ⅡビジュアルⅡ」をデータベースとしながら、2000 年以降に報道された掲載記事を調査し

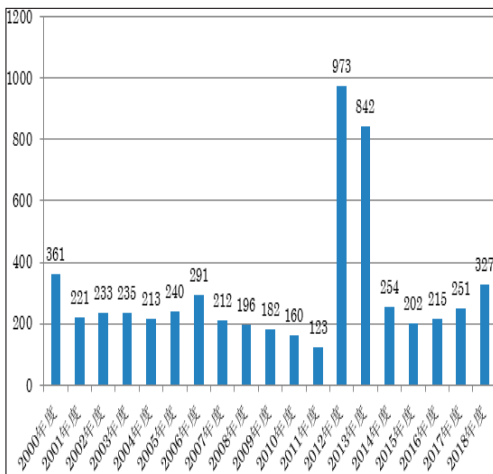


図 1 体罰に関する掲載記事数

た。その際の検索のキーワードを「体罰」とし、対象紙誌を「朝日新聞」と限定した。期間を2000 年以降とした設定した背景には2013 年4 月に日本オリンピック委員会や日本体育協会（日本スポーツ協会）などの体育スポーツ関連5 団体が暴力根絶宣言を発したところに起因する。記事の件数は2000 年度361 件、2001 年度221 件、2002 年度233 件、2003 年度235 件、2004 年度213 件、2005 年度240 件、2006 年度291 件、2007 年度212 件、2008 年度196 件、2009 年度182 件、2010 年度160 件、2011 年度123 件、2012 年度973 件、2013 年度842 件、2014 年度254 件、2015 年度202 件、2016 年度215 件、2017 年度251 件、2018 年度327 件であった（図1）。

加えて、ここでは部活動と関連した記事のみを抽出し、図2の通りまとめた。

2000 年度は20 件、2001 年度は14 件、2002 年度は19 件、2003 年度23 件、2004 年度は18 件、2005 年度27 件、2006 年度は25 件、2007 年度は14 件、2008 年度は24 件、2009 年度は20 件、2010 年度は17 件、2011 年度は11 件、2012 年度は230 件、2013 年度は206 件、2014 年度は45 件、2015 年度は28 件、2016 年度は24 件、2017 年度は42 件、2018 年度は37 件であった。

また、図3は体罰とバレーボールをキーワ

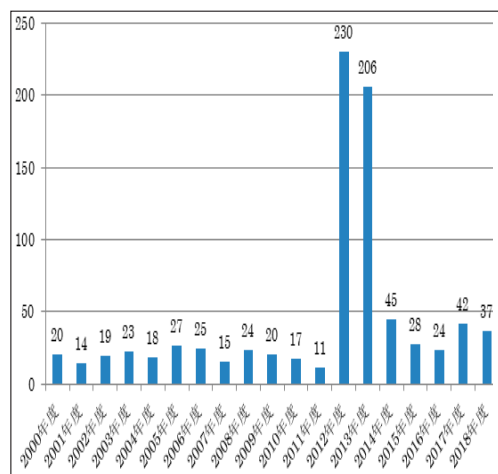


図 2 各年度の部活動に関連する体罰の掲載記事数

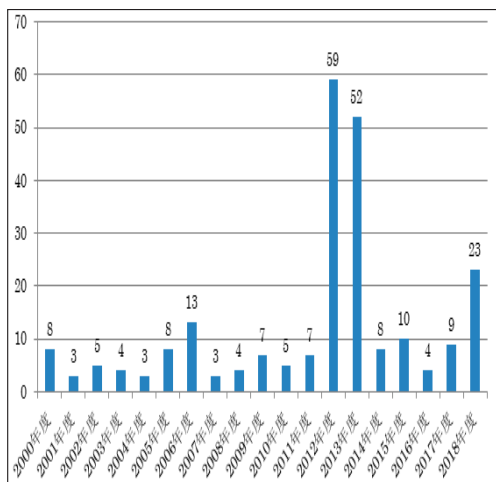


図3 体罰とバレーボールに関する新聞記事数

ードとして検索し抽出した関連記事を取り上げた。

2000年度は8件、2001年度は3件、2002年度は5件、2003年度は4件、2004年度は3件、2005年度は8件、2006年度は13件、2007年度は3件、2008年度は4件、2009年度は7件、2010年度は5件、2011年度は7件、2012年度は59件、2013年度は52件、2014年度は8件、2015年度は10件、2016年度は4件、2017年度は9件、2018年度は23件であった。

それぞれの記事数を参照してみると2012年度と2013年度の掲載数が突出している傾向がある。これは2012年12月に発生した大阪市立桜ノ宮高等学校で発生した体罰事件が関連しているものと推察できる。

一方でこれらのデータから考えるべきは2013年度および2012年度の体罰に関する記事が突出していることにのみ着目するのではなく、その他の年度においてもある一定数の体罰に関する記事が掲載されていることである。2000年度以降のおおよそ20年間に亘って体罰というキーワードは社会の関心事として取り扱われてきたということである。しかしながら、トレンドのように一過性のトピック記事で消滅していることもあるようにも考えることができる。その消滅の仕方の是非に

ついて検討する必要性はあるだろうが、体罰や行き過ぎた指導は2012年度以降も根絶しきれていないことを理解することが可能であろう。

次に体罰とバレーボールの記事とりわけ2013年以降に報道された記事内容から体罰の態様について分類するものとする。2013年度以降に生じた体罰とバレーボールの記事に着眼した意図には、2013年4月に日本オリンピック委員会や日本体育協会（日本スポーツ協会）などの体育スポーツ関連5団体が暴力根絶宣言したことや国内のバレーボールの統括団体である公益財団法人日本バレーボール協会もコンプライアンス宣言をし、体罰・暴力の相談窓口の開設をするなどの改革を実施した年度であった為である。その改革年度以降の状況を把握したい。

ここでは2013年度から2018年度までに報告された体罰について明記する（表1）。

表1 2013～2018年度の体罰の実態報告

	報告数	①	②	③	④	⑤
2013年度	20	16	1	1	1	1
2014年度	7	5	1	1	0	0
2015年度	11	7	2	1	1	0
2016年度	8	16	1	1	0	0
2017年度	4	3	1	0	0	0
2018年度	13	6	3	2	2	0

その態様について①「素手等の身体の一部を使用した、叩く、蹴る行為」、②「物等の武器を使用した行為」、③「投げる・転倒させる」、④「暴言」、⑤「その他」に分類する。ここでの分類ではバレーボールの指導者がどのような体罰を犯している傾向にあるかを明らかとするためである。

2013年度から2018年度までの体罰とバレーボールに関連した記事を参照し、体罰の態様件数から認識出来ることは、「素手等の身体の一部を使用した、叩く、蹴る行為」が多く、特に「平手でたたく」という表現が目立

っていた。またボールやシューズ等の履物を使用した「物等の武器を使用した行為」の態様も報告されている。

部活動場面にボールが存在している競技種目では、ボールを用いた体罰が生起し、さらにはボールを手で扱うという競技特性が影響してか平手でたたくという行為に繋がっているかもしれない。それぞれの競技で生起している体罰の態様を明らかとしていくことによって指導者への体罰抑止の警笛に成り得るかもしれない。

Ⅳ. 6校のバレーボール部で生起した体罰の報告

ここでは2013年浜松日体高等学校男子バレーボール部、2015年佐野日大高等学校女子バレーボール部、2017年足利工業大学附属高等学校男子バレーボール部、2017年松本国際高等学校男子バレーボール部、2018年正智深谷高等学校女子バレーボール部、2019年長野日本大学高等学校女子バレーボール部で発生した体罰について着目し、それらの体罰の態様とその動機を明らかとし、体

表2 6校の体罰の態様とその動機

記事掲載日	態様	動機
2013年9月17日	生徒複数名へ平手打ち	プレーがよくないので気合いを入れるつもり
2018年1月18日	生徒一人に右太ももを3回蹴り、胸を5回たたく	チームを引き締めるため
2017年12月1日	生徒1名を正座させ、胸を複数回殴る	カットとしてやった
2018年10月17日	不明	不明
2018年9月13日	部員に対してボールをぶつけたり、暴言をはいたり	うまくなって欲しいという思いがいきすぎた
2019年7月25日	女子生徒複数名のジャージの胸ぐらをつかんで壁に押しつけ、適切でない言葉を使った	求めているプレーができなかったので、手を出してしまった

罰に至った経緯を探ることとする(表2)。

【2013年浜松日体高等学校男子バレーボール部】での体罰の態様は、生徒複数名への平手打ち、その動機は「プレーがよくないので気合いを入れるつもりだった」だったと報告している(記事掲載日:2013年9月17日)。

【2015年佐野日大高等学校女子バレーボール部】での体罰の態様は、生徒一人に右太ももを3回蹴り、胸を5回たたいた、その動機は「チームを引き締めるため」などと説明している(記事掲載日:2018年1月18日)。

【2017年足利工業大学附属高等学校男子バレーボール部】での体罰の態様は、生徒1名を正座させ、胸を複数回蹴る、その動機は「カットとしてやった」と報告した(記事掲載日:2017年12月1日)。

【2017年松本国際高等学校男子バレーボール部】での体罰の態様および動機については明らかとせず、行き過ぎた指導があったことを報告した(記事掲載日:2018年10月17日)。

【2018年正智深谷高等学校女子バレーボール部】での体罰の態様は、部員に対してボールをぶつけたり、暴言をはいたりした、その動機については「うまくなって欲しいという思いがいきすぎた」と弁明した(記事掲載日:2018年9月13日)。

【2019年長野日本大学高等学校女子バレーボール部】での体罰の態様は、女子生徒複数名のジャージの胸ぐらをつかんで壁に押しつけ、適切でない言葉を使った。その動機には「求めているプレーができなかったので、手を出してしまった」と説明した(記事掲載日:2019年7月25日)。

これらの体罰の動機から理解し得ることは、暴力を行使する者は部員に何かしらの変化を施す為に暴力を行使している傾向にあるということであろう。

Ⅴ. 暴力の発動の動機から体罰の生起を考える

ここでは人間の暴力の発動形態に関して幾つかの型について触れたい(大淵1987)。そ

の際、体罰等の暴力的指導を他者に対して有害な刺激を与える行動との視点を有するものとしている。

殺人等の犯罪に関わるような激しい暴力行動の動機については金銭、復讐、名誉が挙げられている (Wolfgang, 1958; Zillmann 1979). なかでも名誉動機には二つのタイプがある。一つは侮辱された人が激情に駆られて行う暴力などで、そこには自己評価の損傷が怒りの原因になっている (Goldstein 1975). もう一方のタイプは仲間から臆病と言われるのを恐れて暴力的に振る舞うタイプである (Toch 1969). このような激しい暴力ではなく、日常的なレベルでの暴力行動の動機には、相手の行動を変化させたいという規制する動機が起因している (大淵・小倉 1984). それには報復など相手に敵意を有する場合と敵意を含まない行動規制や関係強化としての暴力行動の場合がある。これらの暴力行為とその動機の構造は、相手に対する敵意を含む敵意的動機群と敵意を含まず相手の行動のコントロールだけを目的とする道具的動機群に分類することができるとしている (大淵・小倉 1985).

以上のような視点をを用いて上述した5校の体罰を考えてみると、体罰については日常的なレベルの程度の暴力行動の動機にあたり、敵意を含まない相手の行動規制や自己と相手との関係を強固な形へと変化させる為の関係強化であり、尚且つ道具的動機群による暴力行動であったことが伺えるであろう。

さて、暴力行動が対人に生起する場合には4つのタイプの暴力に分類することが可能であることが提示されている (大淵 1987).

一つ目は、回避反応としての暴力である。これは予想された危害を回避したり、受けた被害を回復したりする正当防衛的な暴力にあたる (大淵 1984).

二つ目は、強制としての暴力である。これは心理学における社会的影響理論にあたる (Tedeschi 1983, 1984). 社会的影響理論のなかには情報の操作によって影響を与えようとする説得、行動療法のように報酬によって影

響を与えるものもある。一方で罰を用いて他者へ影響を与えようとする場合があり、これが強制としての暴力にあたる。強制としての暴力には、威嚇や脅しの形態をとり、説得や報酬が有効ではないと判断された場合に用いられる。強制としての暴力は、身体運動中に生起する場合といえ、その理由には身体運動中は興奮状態であることから情緒が落ち着かず、認知機能が低下している傾向にあるからである。

これらを考慮してみれば、スポーツ指導場面は、指導者もボールを打つや蹴る、走るなどの身体運動をしている傾向にある為、暴力行動を生起し易い環境に身を投じていることになるかもしれない。このタイプの人の傾向として、自信が欠如していることが挙げられる。他者を自分に従わせる専門性、地位、権威、個人的魅力などに自信がなく、自己評価の低い人に多いといわれている。

三つ目は、制裁としての攻撃である (大淵 1987). 個人や不正、不当をした人に対して行ない、違反者の行動を矯正するためや違反を目論む人々に対して威嚇する意味が含まれている (Felson 1984). 苦しみを味わせたいという動機で行なわれる報復や復讐が制裁としての攻撃にあたる。報復においては敵を苦しませることによって自分の敵意や憎しみを晴らすことが目的にある傾向に強く、敵意的な動機が強く働いている。制裁としての攻撃は、チーム運営上のルールを犯した者に対して行使されているとも考えることが出来る。

四つ目は、印象操作としての暴力である (Goffman 1959). 人々は他者の心に映る自分の印象に強い関心を持っていることから常に自分に対する情報を操作しようとする傾向にある。他者による知覚や帰属が自分にとって不利なものになりそうな場合にそれを変更する為に暴力での解決に到ることが挙げられる。プライドが傷つけられる、体面や面子がつぶされる、弱虫や無能、権威が無い、男らしくない、自己中心的などの侮辱として知覚された際に反撃しないとそれらを肯定してし

まうことになる為に暴力的になるのである。このタイプの場合、観衆の数や暴力を称賛する周囲の状況によって暴力の生起の仕方が異なる。

以上のように対人機能として暴力の4つの形態を紹介した。これらを参考とし、6つの体罰問題を紐解いてみよう。

【2017年松本国際高等学校男子バレーボール部】の体罰について生徒等への配慮の都合から体罰の態様と動機が明らかとされていない。その他の5つ体罰の動機から伺うことができるのは、指導者の感情が多分に関連した衝動的な体罰の型があること、指導者の指導方法の一助や状況転換を求めるが故の体罰があることであろう。

例えば、【2017年足利工業大学附属高等学校男子バレーボール部】で起こった体罰は指導者の欲求不満などによって生じた不快な情動感情が関与した衝動的な行為の現れともいえる。

一方、【2013年浜松日体高等学校男子バレーボール部】や【2015年佐野日大高等学校女子バレーボール部】、【2018年正智深谷高等学校女子バレーボール部】、【2019年長野日本大学高等学校女子バレーボール部】の体罰では、指導者による選手やチームに対しての状況打開の一つの手法としての体罰であったと認識することができるであろう。

しかしながら、体罰の生起の過程に情動が関係していることを踏まえると体罰の動機の発端には感情への刺激であることから指導者の衝動的な感情の影響が起因した後に、選手やチームの状況展開の為の一つの手法として体罰を行使しているようにも考えることが出来る。つまり、敵意的かつ道具的が混在した型の体罰の表出の仕方があると推察できる。

体罰の実態からそれらの暴力の発動形態を考えてみると、暴力の生起の深層を掴むことが出来たのではなかろうか。人の行動選択において暴力が使われるか否かは、個人の認知過程である帰属、推測、予測、判断に依存すると考えられており、特に対人葛藤場面にお

いては自分に有利なように解決する為の個人の対人技能や戦略が用いられる。その解決の一つの手法として暴力が含まれていることになる。その暴力の生起は、人々の情動に起因していることから暴力を生起させないような自己制御機能を高める必要がある。

暴力は相手との立場等の社会的地位の勢力差に応じて、人は弱者に対する時ほど威嚇などの暴力的な戦略を使う傾向にあることが明らかとされていることを踏まえると教育現場、スポーツ指導現場における教師と生徒や指導者と選手の狭間には暴力が出現しやすい関係性が存立しているのかもしれない。

VI. おわりに

本稿は、長らく続く体育スポーツ指導場面の体罰問題の根源的理由を再考するものであった。「朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱビジュアル」を用い、部活動中における体罰問題に関する新聞報道の記事を抽出し、体罰の様態と動機について分析を実施した。

その結果、バレーボール指導者の体罰は、戦略的に暴力を行使し、相手を自分の思い通りに操作しようとする者や自己の情動に身を任せ衝動的に暴力を振るう者がいることを明らかとした。つまり、指導法の一つに暴力を位置づけている実態や自己の情動を管理せずに暴力を発動させている故由があることが理解された。

こうした体罰の動機を読み解けば思惑があって体罰を行使するタイプの暴力には、対象者に対する期待する解を導き出す為の手法として暴力を用いていることが明らかとなっているが、その深層には日本のスポーツ文化の普及発展時における土着の具合に起因したり、指導者と選手または先生と生徒という地位や立場による構造的な問題があったり、商業主義と結びついた学校運動部活動としての競技スポーツの変遷など多岐に亘る理由が見え隠れしていると考えられる。

【参考文献】

- Felson, R.B. (1984) Patterna of aggressive social interaction. In A.Mummendey(ED.)Social psychology of aggression:From individual behavior to social interaction. New York:Springer-Verlag.107-126.
- Goffman, E (1959) The presentation of self in everyday life.Garden City,New York: Doubleday, Anchor Books.
- Goldstein, J.H. (1975) Aggression and crimes of violence. New York: Oxford University Press.
- Tedeschi, J. (1984) A social psychological interpretation of human aggression. In A. Mummendey (ED.) Social psychology of aggression:From individual behavior to social interaction. New York: Springer-Verlag. 5-20.
- Toch,H. 1969 Violent men. Chicago: Aldine.
- Wolfgang, M.E. & Strohm, R.B. (1959) The relationship between alcohol and criminal homicide. Qaurterly Journal of Studies on Alcohol, 17, 411-425.
- Zillmann, D. (1979) Hostility and aggression. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 大淵憲一・小倉左知男 (1984) 怒りの経験 (1) : Averill の質問紙による成人と大学生の調査概況. 犯罪心理学研究. 22, 15-35.
- 大淵憲一・小倉左知男 (1985) 怒りの動機 : その構造と要因及び反応との関係. 心理学研究. 56, 200-207.
- 大淵憲一 (1987) 攻撃の動機と対人機能. 心理学研究. Vol. 58, 113-124.
- 阿江美恵子 (1991) スポーツ指導者の暴力的行為について. 藤村学園東京女子体育大学紀要. 26, 9-16.
- 阿江美恵子 (2000) 運動部指導者の暴力的行動の影響 : 社会的影響過程の視点から. 体育学研究. 45, 89-103.
- 大淵憲一 (2007) 攻撃と暴力 : なぜ人は傷つけるのか. 丸善ライブラリー.
- 小林直樹 (2011) 暴力の人間学的考察. 岩波書店.
- 藤田圭一・宇部弘子・福場久美子・鈴木悠介・本間悠也・小川拓郎・深見将志・藤本太陽・齋藤雅英・谷釜了正 (2014) 体罰・暴力における体育専攻生の意識と実態. 日本体育大学紀要. 44-1, 21-32.
- 松田太希 (2015) スポーツ集団における体罰温存の心的メカニズム : S.フロイトの集団心理学への着目から. 体育・哲学研究. 37, 85-98.
- 松田太希 (2016) 運動部活動における体罰の意味論. 体育学研究. 61, 407-420.
- 大峰光博 (2016) 運動部活動における生徒の体罰受容の問題性 : エーリッヒ・フロムの権威論を手掛かりとして. 体育学研究. 61, 629-637.
- 村本宗太郎・松尾哲也 (2016) 大学運動部員における高校期の被体罰経験と運動部空間の特性に関する研究. 立教大学コミュニティ福祉研究所紀要. 4, 85-96.
- 佐久間正夫 (2016) 琉球大学教育学部生の「体罰」に対する意識について. 琉球大学教育学部紀要. 45, 93-103.
- 宮坂敏一・田原卓・福場久美子・藤田圭一 (2016) 体育専攻生の体罰認識度に関する研究 : 苦痛の因子構造及びその条件設定との関連性. 日本体育大学紀要. 45, 119-129.
- 長谷川誠 (2016) 学校運動部活動における「体罰」問題に関する研究 : 体罰を肯定する意識に注目して. 神戸松蔭女子学院大学研究紀要. 5, 21-34.
- 谷釜了正・福場久美子・市川優一郎・小川拓郎・鈴木悠介・宇部弘子・軽部幸浩・藤田圭一 (2016a) 日本体育大学における体罰排除教育の取り組み : 縦断的な視点に基づいて. 日本体育大学紀要. 45, 141-150
- 谷釜了正・福場久美子・宇部弘子・鈴木悠介・深見将志・市川優一郎・軽部幸浩・藤田圭

一（2016b）日本体育大学における体罰経験の実態と変容：学年による比較分析．日本体育大学紀要．46, 77-90.

谷釜了正・福場久美子・宇部弘子・鈴木悠介・深見将志・市川優一郎・軽部幸浩・藤田圭一（2016c）日本体育大学における体罰排除教育の効果：卒業年次生の分析．日本体育大学紀要．46, 91-104.

山川勝久（2017）体罰防止を目指した教員養成とその課題：「教職論」の授業実践を通して．東海大学課程資格教育センター論集．15, 127-139.